

獣医のざんげ

体を切り刻む残虐さ恥じ

会社退職し町で診療活動

最近、「求める会」へ一通の手紙が届いた。差出人は三十五歳の獣医師で、「私の体験談」という題がついていた。

「私は、子どものころから犬や猫が好きで毎日友だちのように遊んですごしました。やがて獣医学部に入學。大学では獣医病理学という臨床とはあまり関連のない学問を専攻しました。病気の性質や原因を探るといって科学分野に興味を持ったからです。卒業後、ある製薬会社研究所に就職しました。

私が担当した仕事は、ヒトの新薬候補品を犬に投与して、毒性を研究することでした。本来、大好きな私は、研究用とはいえ、従順で人なつこいビーグル犬に毎日あそぶことにうれしさを感じていました。上司から仕事の詳細を聞いて、あるいは強制的にやらされてがく然としました。

毒性研究とはいっても、相手は犬なのです。ヒトに使われる時とあまり変わらない毒物量を投与して何らの苦痛なく、健康診断のごとく、尿、血液検査、レントゲン、コンピュータ断層撮影（CT）検査、心電図検査やせいぜい麻酔下でのバイオプシー検査（吸引針を使って臓器の一部を採取して病理検査する）などを行って研究するものでした。

「求める会」二へ一通の手紙が届いた。差出人は三十五歳の獣医師で、「私の体験談」という題がついていた。

るし、人以外の生命の尊厳のほうとくである。憤怒を禁じえませんでした。仕事とはいえ、自分の立場を思ったとき獣医にあるまじき行為ではないかと思いました。

ヒトへの安全性を見きわめるために、実際にはほとんどありえない大量の、致死量ほどの薬物量を一度に、あるいは何カ月間にもわたって動物に投与したり、最新の医療検査などで苦痛なく診断が可能であると思われるのに、あえて学問をもちとくするような発生検視を義務づけるなど、科学でも何でも、人間のごう慢さに立脚した、独りよがりの満足にすぎないのではないかと、このように動物を犠牲にしているのだからと、思ったのです。

しかし、当時私にはすでに家族があり、食べていくためには一応名の通った会社をやるということができず、取り出す、目をくりぬく、腸を取り出し、はきみですべて裂く、心臓、肺臓、肝臓、腎臓、脾臓（ひそ）を取り出し、メスで切り裂く――など。真の学問のほうとくでもありません。

「犬が死ぬまでの薬物量をみつけても、まったく人間の役には立たない。わざわざ犬を殺して検視解剖をしても何の意味もない。犬がなぜ死んだのかを突き止めるのがテーマだ。」

「犬が死ぬまでの薬物量をみつけても、まったく人間の役には立たない。わざわざ犬を殺して検視解剖をしても何の意味もない。犬がなぜ死んだのかを突き止めるのがテーマだ。」

「犬が死ぬまでの薬物量をみつけても、まったく人間の役には立たない。わざわざ犬を殺して検視解剖をしても何の意味もない。犬がなぜ死んだのかを突き止めるのがテーマだ。」

「犬が死ぬまでの薬物量をみつけても、まったく人間の役には立たない。わざわざ犬を殺して検視解剖をしても何の意味もない。犬がなぜ死んだのかを突き止めるのがテーマだ。」

考える
さ映す
の研究
50万人

の改正を要望する
を求める会」(東
を超える署名が集
る。この運動の目
動物を使った生体
るが、わが国は事
」と、国際的にも
る。
・橋爪 竹一郎)



護活動
都文京
所で

係から 投稿は、手紙
(〒530・111住所記入
不要)のほか、パソコンの
ASAHINET「語りあ
うページ」ポスト(会員に
限る)、ファクス(06・
229・2649)でも受
け付けます。

「私の国際交流」「フリ
ートーク」「世相まんが」
もかいてください。あて先
は、いずれも朝日新聞大阪
本社企画報道室「語りあ
うページ」です。掲載分には
薄謝をお送りします。ま
た、朝日新聞社の記事デー
タベースにも採録し、一般
に提供します。

「無意味な殺戮多い」 内部告発で表面化

「犬が死ぬまでの薬物量をみつけても、まったく人間の役には立たない。わざわざ犬を殺して検視解剖をしても何の意味もない。犬がなぜ死んだのかを突き止めるのがテーマだ。」

「実験用サルは地下のお墓のように暗い部屋に入れられていた。何年も拘束しにくくりつけられ、多くのサルが首やおしりのまわりに潰瘍(かいよう)ができていた。サルには適正な食物や水は与えられていなかった」